

入院患者における向精神薬使用と転倒・転落発生に関する症例対照研究

Psychotropics use and occurrence of falls in hospitalized patients: A matched case-control study

森下 千尋¹、市来 真彦¹、志村 哲祥¹、石橋 由基²、犬伏 厚夫³、榎屋 二郎¹、井上 猛¹

1 東京医科大学 精神医学分野

2 慶應義塾大学 医学部 衛生学公衆衛生学教室

3 東京医科大学病院 薬剤部

[Psychiatry and Clinical Neurosciences 2022 76:71-76]

【背景】院内での転倒・転落予防対策は医療安全管理上の最重要課題であり、その危険因子の把握は重要である。先行研究において向精神薬の使用と転倒・転落の関連が調査されてきた。しかし、以前の研究の多くはレジストリ研究であり、向精神薬使用と転倒・転落発生の時間的間隔が不明であるなどといった、研究結果を大きく変えてしまうバイアスがあったため、一致した見解は得られてこなかった。そこで、我々は、院内の転倒・転落リスクとなる向精神薬を明らかにするため、診療記録から正確なデータを収集し、症例対照研究にて、入院患者における向精神薬使用と転倒・転落発生との関連性を評価することとした。

【方法】new-user design を適用することとし、対象は prevalent user(向精神薬を第2病日までに使用した者)を除外した東京医科大学病院の入院患者とした。アウトカムは院内の転倒・転落とした。インシデントレポートに基づき、ケース群として2016年に転倒・転落した者254名を抽出した。各ケースに対し、電子診療記録を使用し、年齢(前後3歳)、性別、診療科によって、同期間に入院した非転倒者をマッチさせた。挙げられたコントロール候補者から、各ケースに対して1:1となるように無作為にコントロール254名を選択した。データの収集には電子診療記録を用いた。ロジスティック回帰分析を実施し、4クラスの向精神薬(抗精神病薬、抗うつ薬、抗不安薬、睡眠薬)の使用と転倒・転落発生との関連性を評価した。多変量ロジスティック回帰モデルにおいては、年齢、性別、診療科、body mass index、同病院で使用している転倒転落アセスメントスコアシートの合計点、及び、他のクラスの向精神薬使用を調整した。本研究は東京医科大学医学倫理審査委員会の承認を得て行った。

【結果】多変量ロジスティック回帰モデルにおいて、睡眠薬使用と転倒・転落発生との関連性は有意であった(odds ratio = 2.223; 95% confidence interval, 1.249-3.956)。一方で、抗精神病薬・抗うつ薬・抗不安薬使用と転倒・転落発生の関連は統計学的有意に達しなかった。

【考察】本研究は、診療記録からデータを収集し、new-user design を適用し、入院患者における向精神薬使用と転倒・転落発生との関連性を厳密に評価した初めての研究である。本研究結果からは、入院患者において睡眠薬使用は転倒・転落の危険因子であることが示唆された。睡眠薬の処方可能な限り控えることが院内の転倒・転落発生率の低減につながる可能性を示したという点で、本研究の結果は転倒・転落リスクの観点からの処方のエビデンスとして臨床意義を有すると考えられる。